

「効率」の悪い伝道をしよう

[聖書] コヘレトの言葉 11章 1～6節

あなたのパンを水に浮かべて流すがよい。

月日がたってから、それを見いだすだろう。

七人と、八人とすら、分かち合っておけ

国にどのような災いが起こるか 分かったものではない。

雨が雲に満ちれば、それは地に滴る。南風に倒されても北風に倒されても
木はその倒れたところに横たわる。

風向きを気にすれば種は蒔けない。雲行きを気にすれば刈り入れはできない。

妊婦の胎内で霊や骨組がどの様になるのかも分からないのに、すべてのことを成し遂げられる神の業が分かるわけではない。

朝、種を蒔け、夜にも手を休めるな。実を結ぶのはあれかこれか
それとも両方なのか、分からないのだから。

[1] 「パン」と「種蒔き」

「あなたのパンを水に浮かべて流すがよい。月日がたってから、それを見いだすだろう。」(11:1) という言葉ですけれども以前の訳では「パンを水に投げよ」という言葉でした。このパンとは何なのか、様々な解釈もあります(海の貿易に力を注ぐ行為とか、或いは他者に善意や親切を尽くすこと)が、私は、これは伝道的な意味で捉えて良いのではないかと思います。11章6節には「朝、種を蒔け、夜にも手を休めるな」ともあるように、意志を持って福音という命の種を蒔きなさい、そうすればそれが、いつどのように実を結ぶのかは隠されているけれども、「月日がたってから、それを見出す」のだ、と言っているのではないのでしょうか。

これは5節の、母親の胎内に命が宿り、胎内でどのようなことが起こっているのか、それは人の目には隠されているけれども、時が巡るとその命との出会いが起こることと同じであり、それは「すべてのことを成し遂げられる神の業」だとコヘレト(伝道者)は言っているのではないかと思います。

伝道とは「種まき」なんですね。これは良く考えると不思議なことだと思います。よく「信仰の継承」と言いますよね。その場合、一人ひとりの中に信仰が芽生えることを言うと思います。信仰は「物」ではありませんから、手渡すことは出来ないのです。「聖書」という本は手渡すことは出来ます。自分が信仰者である姿を見せることも出来ます。でも、その福音の種が芽生えるかどうかは私たちには

分かりません。神様の領域だと思います。それでは、何もしなくても良いのか。いいえ、空しく思えるかもしれないけれども「あなたのパンを水の上に投げない」「夜になっても（暗く思える状況であっても）種蒔きを続けなさい」と伝道者は言うのです。なぜなら、のちの日に、きっとその実りが与えられるから、その神様の働き、神様の業を信じてやっていきなさい、と言っているのだと思います。

[2] 「効率的な」伝道はどこか違う

少し前まで、「伝道」というのは、キリスト教勢力の拡大運動という側面が強かったように思います。それはかつて植民地支配と繋がっていたこともあります。また「教会成長」という名のもとで、大教会を作ることや、バプテスマ者の数を誇るような誘惑に陥ったり、学びや奉仕や献金が強調され、教会に行くということが平安であるより、プレッシャーであることになってしまったということも良く耳にしました。よく考えなければならぬことだと私は思います。今は、教会の歴史の色々な反省の踏まえ、「福音の種蒔き」とは何なのか、そのことを深く考えることが大事な時代になってきていると思います。

イエス様は「種蒔き」の譬えを語られましたね。あのお話は、「効率性」ということを考えると、大分無駄がありますよね。良い土地だけ選んで蒔けばよいのに無駄だと思えるような場所にも同じように等しく蒔いていますよね。神様は、無駄をなさるんです。人の常識から見ると。私たちは何かと言うとつい「めんどくさい」と言って、「もっと効率的、もっと効果的、合理的に」という思考が身についてしまっています。しかし「あなたのパンを水に投げよ」です。「効率」ではない。

[3] 伝道とは、その人を愛すること

そのようなことを考えていた時、私はある本を読んでいて、乗松雅休(のりまつまさやす)という人のことを知りました。ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、私は初めて知りました。そして、「ああ、このような素晴らしい信仰の先達がいたのか」と思いました。この方は57才で召された、日本人初のプロテスタントの海外宣教師です。死んだのは小田原ですが、その骨は、韓国の水原(スウォン)に埋められています。少しこの方のことを紹介させて下さい。

彼は1863年、松山藩士の父の家庭に生まれました。キリスト者になったのは24才位で、神奈川県属の役人だった時です。明治20年の正月、泥酔して道路溝に倒れるような生活をしていた彼を下宿先の老婦人が横浜海岸教会の礼拝に誘ったのです。そこで福音を聞き、これまでの生き方を振り返ってイエス・キリストを救い主として信じました。間もなく伝道者になろうという思いが与えられ、明

治学院神学部に入り、日本橋教会で牧師の手伝いもするようになったと言います。順調にいけば日本基督教会の系譜に連なる著名な牧師になったろうと言われますが、彼はある時、当時日本が支配をしていた朝鮮の人々が辛い思いをして生きているということを聞き、促されるものがあり宣教師になる決意をしました。日本人初の宣教師誕生です。その時彼は**プリマス・ブレザレン**という所の**ブランド宣教師**と出会っていたということも大きいことでした。彼らは自分で献金を集め、自給自足で伝道をするのです。「**朝鮮の人々が真に幸いとなるのは主の福音以外にはない**」と、彼は明治 29 年、単身神戸港から朝鮮に渡りました。

こんなエピソードがあります。渡ってすぐ自分で学んだ朝鮮語が通用するかどうか馬を雇ってソウルに行ったとき、馬子に試したが殆ど全滅だったけれど、一言「**ハナニム(神様)**」だけは通じた。嬉しくなった乗松は、その後「ハナニム」だけをいつも繰り返しては馬に乗って天を指さしていた。周りの者は怪訝な顔をしていたというのです。彼の伝道の情熱が伝わってきます。一軒家を借り、彼がまず始めたのはハングル語での伝道冊子を作り配布することでした。ソウルでそれが用いられ、彼を訪ねる者も出てきて、その年の暮れには二人の人が受洗したと言います。そのご一時期ソウルでブランド宣教師と働きをしていましたが、スウォンから一人の信徒が「私たちの所で伝道して欲しい」と訪ねて来て、乗松はそれからはずっとスウォンで暮らしました。結婚し、子供も生まれました。彼はいつもバジ・チョゴリという朝鮮服を着、草鞋履きで、妻の和子も和服こそ着ましたが、草履履きでした。貧困な生活で、ある時は奥さんは髪を売り、またおからで飢えをしのぐような暮らしをしていたそうです。しかし周りの人の証言によると、いつも「**乗松は、感謝と祈禱の人**」だったと伝えられています。

彼はただ朝鮮の人たちのために献げました。現地の日本人相手ではないのです。スウォンでは朝鮮人信徒によって「スウォン聖書講堂」が建てられ、そこを拠点に伝道が広がりました。1912 年・大正元年には 49 名の受洗者が生まれたほど祝福されました。しかし彼の体は長年の貧困と過労で衰弱し、結核も患い、涙ながらに朝鮮人信徒の嘆願によって 2 年後に家族と共に帰国し、大正 10 年に小田原で召されました。妻に告げた最後の言葉はこうだったそうです。「**主の御手に全て委ねたて申してあるから何も言い遺すことはない。ただひとつ心にかかるのは朝鮮の伝道だ**」と。

後に彼に導かれて伝道者となった金・テヒという人が、葬儀に駆け付け、このように語ったと言います。—「**イエス・キリストは神であるのに、人とおなりなされた。この愛に励まされて乗松兄は朝鮮の人を愛されました。世の中に英国人・米国人に**

なりたい人は沢山おります。けれども乗松兄は(不逞朝鮮人と言われていた)朝鮮人になりました。この愛はいかなる愛でありましょうか」。—これは乗松雅休の信仰と生き様を良く言い表していると思います。

マザー・テレサのこのような言葉を思い起こしました。「はじめは、私は人を回心させなければと思っていました。しかしやがて私の使命は、愛することだと分りました。そして愛は、望む時に回心させてくれるのだということが分りました。」

伝道とは、「人を愛すること」なのだと。愛の伴わない伝道は「伝道」とは言えないのではないのでしょうか。それでは強制、折伏であってしこりを残すでしょう。私たちは種を蒔けば良いのです。後は**種の力**に任せましょう。その人の心にいつかその種が芽生え、成長が与えられるように祈りましょう。諦めず、失望せず、その方がイエス様の愛に捕えられ、自由になり、喜びが生まれるように、平安に包まれるように祈りましょう。…「**祈り**」は「**愛**」ではないのでしょうか。私たちは、信仰者として自分だけの喜びに安住するのではなく、他の人への「愛」が問われているのですね。

[4] 主イエス・キリストが私たちに仕えて下さったのだから

おかしい言い方かもしれませんが、イエス様も、人の心には土足で入っていらっしゃるお方ですよ。あの**サマリアの女性**には「**水を飲ませて下さい**」と**自らが願い出**ておられます。そうしたら女性の方が心を開き始め、対話が深まりました。遂にメシアの話になり「**その方を信じたいのですが**」と、彼女の中に求める思いが芽生えさせるようにされたのです。最後には彼女は水瓶を置いたまま、サマリアの、これまで自分を避け、また自分でも隠れるようにしていた町の者たちに「**来てごらん下さい**」と伝道したのです。…イエス様がされたことも種蒔きですね。あとは聖霊の風、神様の息吹によって、その方の心の土壌が耕されていくのです。イエス様は当時の重たい皮膚病の者にも触れて癒され、墓場を住まいとする疎外された病者をも訪ね、また、重罪を犯し死刑の現場にいる者にも、自ら**十字架**につけられながら「あなたは今日私と共に楽園にいる」(ルカ 23:43)とおっしゃいました。この救い主は途方もない愛のお方です！**ひとり、ひとり、またひとり**です。決して効率的ではありません。しかし、だからこそ愛を注げるのです。

私たちのためにも、イエス様は、**他の誰でもなく、わたし用に**合わせて出会って下さったのではないのでしょうか。私たちがイエス様を求めたと言うより、イエス様の方から私たちに近づいて下さった。「**きょう、あなたの家に泊まることにしている**」(ルカ 19:5)。その招きからイエス様との触れ合い、交わりが始まったのです。

いつも礼拝の最後は「祝祷」がありますが、あれはイエス様からの派遣でもあります。イエス様と出会った者は皆、主の証し人です。イエス様は「仕えられるためではなく、仕えるために来た」(マルコ 10:45)とおっしゃいました。主ご自身が、天の栄光を捨てて人間になり、十字架について下さったのに、私たちが偉そうに生きていたらおかしいですね。自分もその福音に生かされて自由にされることが大事ですよ。主を愛することと、人を愛することは一つなのだと教えられます。それが「水の上にパンを投げる」こと、「種蒔きをする」ことなのだと思います。

お祈り致します。

愛する主よ、私たち罪人を愛して下さい、心より感謝致します。そのあなたの愛を、わずかかも知れません、いや、本当に大海の一滴にもならないかもしれませんが、しかし、どうかこの身をもって、あなたのその愛と真実を証させて頂けますように。私たちの力ではありません。あなたの種の花、聖霊によって、私たちを自由にし、自分にこだわる心から隣人を愛する者に変え続けて下さいますように。もっと、深くあなたとの交わりに生きることが出来ますように。私たちのこの教会も祝福して下さい。全世界の主の教会の働きを励まし、用いて下さいますように。主の御名によって祈ります。アーメン。